企画展

大倉集古館 寄贈品展

2024年
9月14日(土)~10月20日(日)
公益財団法人 大倉文化財団 大倉集古館

このたび大倉集古館では、設立者である大倉喜八郎や嗣子の喜七郎ゆかりの作品を含む「寄贈品展」を開催いたします。大倉家が支援を行い、正倉院御物整理掛として正倉院宝物の修理を手掛けた木彫工芸家・木内半古や息子の省古による作品、長くご寄託いただいていた大倉喜七郎ゆかりの近代絵画、古備前再現を目指した作陶で知られる森陶岳による備前焼など、魅力ある作品をご紹介いたします。

日中のかけはし・王一亭(王震)の書

王一亭(名は震)(1867~1938)は、中国・清時代末から民国時代初期に活躍した実業家で書画家です。中国最後の文人と称される呉昌碩(1844~1927)の弟子であり友人で、熱心な仏教信者でもありました。上海を中心に活躍し、日清汽船の買弁(日中の仲介役)となり、後に上海実業界の指導者的存在となります。また、中国同盟会に参加した革命派としても名が知られます。ご寄贈品である図2は中国・唐時代の王之渙作「涼州詞」を書写し、大倉組副頭取・門野重九郎(1867~1958)(図1)に贈ったものです。この作品は後に、門野から大倉組監査役の肥田耕三氏に贈られ、この度、ご遺族から大倉集古館へご寄贈いただきました。大倉集古館には、当時の大倉組頭取であった大倉喜七郎(1882~1963)旧蔵の王一亭の書や絵画(図3)も所蔵されています。本作は大倉組と王一亭、ひいては上海の実業界と大倉財閥とのつながりを示す貴重な作品といえます。

【参考文献】大倉集古館『大倉組商会150周年 偉人たちの邂逅 近現代の書と言葉』展図録(2023年)

図1 門野重九郎

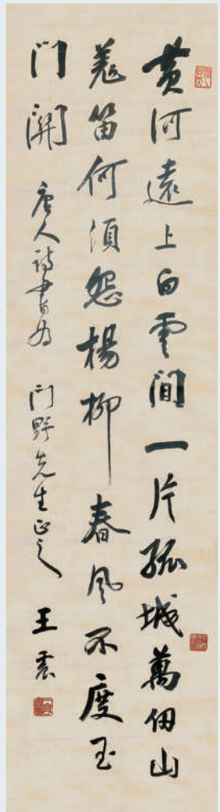
図2 王一亭《行書王之渙涼州詞軸》
中華民国時代・20世紀

図3 王一亭《達磨面壁図》
中華民国時代・20世紀
※今回は展示されません

保坂なみによる刺繍

保坂なみ(1878[戸籍上は1879]~1960)は、共立女子職業学校の刺繍編物両科を明治34年(1901)に首席で卒業し、翌年の日本女子美術協会展に刺繍「高砂」で一等褒賞を受賞しました。明治36年から38年までは山形県立酒田高等女学校助教諭心得として勤めました。

明治期、女性が社会で生き抜いていくために必要とされた技術の一つとして刺繍が教えられており、質の高いものは万国博覧会へ出品されたり、皇室へ献上されました。明治の女性による質の高い刺繍の作品をご覧いただきます。

【参考文献】保坂三郎『子育』(1989年、永濱出版企画)

図4 保坂なみ《袱紗 牡丹に胡蝶模様刺繍》(部分)
明治・19~20世紀

江戸時代の竹取物語

かぐや姫の物語で知られる竹取物語は、平安時代初期9~10世紀には成立したとされますが、絵画化され広く流布するのは江戸時代、17世紀に入ってからです。本作の挿絵は、籠に入れられたかぐや姫が竹取の翁夫婦に養われる場面から始まります。物語の中心である求婚者たちが無理難題を解決しようとする苦難の場面や、クライマックスであるかぐや姫が月へ帰る場面は描かれず、屋敷の場面のみで構成されます。

また、本作は明治~昭和のジャーナリスト・徳富蘇峰(1863~1957)が旧蔵し、大正13年(1924)11月に「威子嬢」(詳細不詳)に贈ったものです。竹取物語は嫁入道具として好まれたともいわれ、威子嬢の嫁入りの際に贈られたものかもしれません。徳富蘇峰は、大倉喜八郎とは30年来の仲と記しており、奇しくも蘇峰旧蔵の本作は巡り巡って大倉集古館に所蔵されることとなりました。

図18 奈良絵本『竹取物語』 江戸時代・17世紀

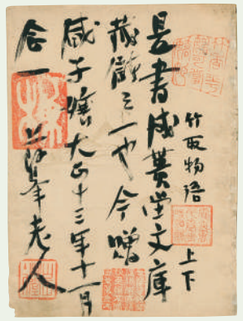
図19 徳富蘇峰書付

挑戦者・森陶岳の作陶

備前焼は、釉薬を使わない究極にシンプルな焼き物です。土の性質や、窯詰めの方法、灰によって生み出される自然の作為によって神秘的な景色が生み出されます。森陶岳(1937~)は、備前焼の古くからの窯元(備前六姓)のひとつ、森家に生まれた陶芸家です。古備前に魅せられ、室町~桃山時代の大窯を再現し、一度絶えてしまったその焼成法を模索し、古備前の魅力の源を追究し続け、さらに古備前を超えた独自の作風を切り開きました。

今回ご寄贈いただきました作品は、陶岳が作陶を始めた1970年代初頭から2000年にかけてのもので、主な作品は、茶陶である《備前緋襷鬼桶水指》(1974年頃)や《備前茶垸》(1997年)、独自性を出した《彩土器》(1985年)や《備前半月台鉢》(1986年)、そして備前らしい器形の《備前大蕪花入》(1986年)や《黒備前手鉢》(2000年)など、56件となります。また、手法としては、伝統的な備前の様式のものと、創作陶芸としての側面の強い作品の2種類に分けられます。これらの中には白瓷や黒瓷、施釉陶器や黒備前など様々な挑戦の跡を見ることができます。「柔和さにつつまれた剛毅な造形」と表現される森陶岳作品の魅力をお楽しみください。

【参考文献】大倉集古館『大倉集古館所蔵 森陶岳作品集』(2024年)

図20《備前緋襷鬼桶水指》
昭和49年(1974)頃

図21《備前茶垸》 平成9年(1997)

図22《彩土器》 昭和60年(1985)

図23《備前半月台鉢》 昭和61年(1986)

図24《備前大蕪花入》
昭和61年(1986)

図25《黒備前手鉢》 平成12年(2000)

執筆:四宮美帆子(大倉集古館 主任学芸員)、デザイン・製作・印刷:ニューカラー写真印刷株式会社、発行:大倉集古館 2024年9月14日発行

木内半古・省古の木彫工芸品

木内喜八(1827〜1902)・半古(1855〜1933)・省古(1882〜1961)は、３代続く江戸・東京で活躍した木彫工芸家です。船大工の家に生まれた喜八は、幕末から明治の激動期、細工師として頭角を現し、内国勧業博覧会で賞を受けるなど活躍しました。甥で二代を継いだ半古も内国勧業博覧会などを発表の場とし、後に宮内省正倉院御物整理掛に出仕し、正倉院宝物の修理や模造を行います。半古の次子である省古は、父とともに正倉院宝物に触れて研鑽を積み、戦前は万国博覧会などでその妙技を讃えられ、戦後は日本工芸会理事としても活躍しました。

大倉家は、初代と二代を支援したことで知られます。大正11年(1922)11月４〜５日、日本橋倶楽部において「木内喜八翁記念展覧会」が開催されます。発起人筆頭に大倉喜八郎の名前が記され、喜八郎以外の発起人11名の中には、東京芸術大学総長の正木直彦や、彫刻家の高村光雲、当時大倉集古館館長であった今泉雄作などの名が見えます。賛助員69名の中には幸田露伴などの文化人、伊藤博文の右腕として知られる金子堅太郎などの政治家・貴族院議員などの名前もあり、喜八郎の尽力により木内の作品を世に広めようとする気概が感じられます。

初代喜八と大倉家とのつながりを示す作品は、明治10年(1877)の作で、大倉家の家紋である五階菱の模様をあしらった《屋久杉扇面流図透彫衝立》(大倉家旧蔵)があり、他に明治30/31年作《萩に虫文螺細桐造火鉢》(当館蔵)(図5)は、大倉喜八郎宅で使用されていた写真が遺ります(図6)。

図5　木内喜八《萩に虫文螺細桐造火鉢》
明治30 / 31年(1897 / 1898)
※今回は展示されません

図6　大倉家で使用された火鉢

二代半古と大倉家の関係では、大正４年作《和歌色紙象嵌硯箱》(奈良国立博物館蔵)が、口承であるものの象嵌部分の文字は大倉家所蔵の本阿弥光悦書を参考に制作したものとされます。大正５年東京彫工会展で銀賞を得た《蠟色地和歌銀象嵌硯箱》(大倉家旧蔵)は、大倉喜八郎自筆の和歌を象嵌した作品で、本阿弥光悦《舟橋蒔絵硯箱》(東京国立博物館蔵)を模したものでした。この２作品から、光悦を好みその書を学んだ喜八郎が、光悦の漆芸に倣う作品をも作らせたことが分かります。他にも大正６年作《蠟色地銀文字象嵌硯箱》と《金溜地金文字象嵌硯箱》は、蓋表に山縣有朋の号「含雪」をあしらったもので、これも大倉家旧蔵品であり、山縣有朋と喜八郎との繋がりを示す作品です。現在大倉集古館には半古作《四君子象嵌重硯箱》(昭和６年)(図7)が所蔵されています。

ここに記した大倉家旧蔵品は、木内武男編『木内喜八・半古・省古　三代木工芸作品図録』(2006年、講談社出版サービスセンター)に所載されており、木内家と大倉家の繋がりを今に伝えてくれます。

この度、ご遺族より二代半古による一重切の竹花入(図8)や、三代省古が娘のためにつくった可愛らしい木画(寄木象嵌)の帯留(図9)、木画の制作過程がよくわかる軸首(図10)などをご寄贈いただきました。大倉家と木内家とのご縁が今につながることを示す作品たちとなります。

【参考文献】保坂三郎『子育』(1989年、永濱出版企画)、奈良国立博物館『名匠三代―木内喜八・半古・省古の木工芸―』展図録(2015年)

図7　木内半古《四君子象嵌重硯箱》
昭和6年(1931)　※今回は展示されません

図8　木内半古《竹花入》
明治〜昭和・19〜20世紀

図9　木内省古
《花喰鳥文木画帯留》
明治〜昭和・19〜20世紀

図10　木内省古《六花文軸首および木画部品》
明治〜昭和・19〜20世紀

大倉喜七郎が愛した近代日本画

大倉集古館を設立した大倉喜八郎の嗣子・喜七郎は、父親の思いを継いで大倉集古館の維持経営に援助を行うとともに、日本の書道界や絵画界への援助も惜しみませんでした。特に画家の横山大観と川合玉堂、書家の松本芳翠、漢詩人の仁賀保香城には、大倉組嘱託の待遇を与え、援助を行ったといわれます。そして彼らとの縁を起点に収集した絵画や工芸品の一部が、このたび正式に大倉集古館に寄贈されました。

今回寄贈を受けた作品中７点は、昭和５年(1930)に、大倉喜七郎が全面的に支援を行ったイタリア・ローマで開催された日本美術展覧会(以下「ローマ展」と表記)に展示されたものです。横山大観を団長に、院展系と官展系画家総勢80名、約170点の作品が展示されました。イタリアやヨーロッパの人々に、日本画のすばらしさを知らせるため、大工や華道師範を帯同し、日本美術の鑑賞に相応しい床の間をしつらえ、生花とともに作品を展示しました。一方でそこに飾られた作品の多くは、江戸時代以前の伝統的な山水や中国の人物を描く絵画とは異なり、身近にある自然や、自然とともに生きる人々・動物のなにげない姿を描いた新しい日本画でした。そして描写方法もまたそれまでの墨の線を主体としたものから、色面や色調の存在が主となり、やわらかな空気感や暗闇を表現し、詩情豊かな画面を作り出すようになります。なおかつそれらは非常に存在感がある大型の掛軸や屏風の形で展示されました。本章では、大正から昭和初期にかけて活躍した画家の作品をお楽しみいただくとともに、改めて喜七郎の審美眼の高さをご覧いただきます。

図11　右から横山大観、大倉喜七郎、川合玉堂、書家の松本芳翠、以下東方書道会メンバー。喜七郎邸後園に建てた王羲之を祀る碑の前で撮影。
松本芳翠『臨池六十年』所載。
昭和7年(1932)4月3日

図12　ローマ展会場入口

図13　開会式に列席したイタリア政府高官

図14　酒井三良《豊穣》　昭和4年(1929)

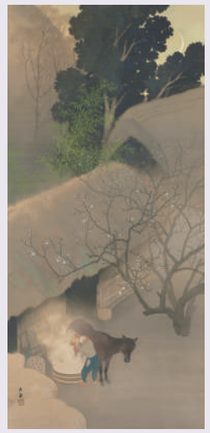

図15　川合玉堂《暮るる山家》
大正7年(1918)

図16　ローマ展展示風景。床の間をしつらえ、生花とともに《梅雨あけ》(図17)を展示。

図17　大智勝観《梅雨あけ》　昭和4年(1929)　現在は額装